令和５年度 第１回 富山県幼児教育推進連絡協議会　会議録

１　開催日時　７月 26 日（水）13:30～15:00

２　開催場所　県民会館３０２会議室

３　出席者（16 名）

石倉　卓子委員、石動　瑞代委員、老　雅裕委員、黒田　卓委員、小島　伸也委員、小林　真委員
寺島　雅峰委員、豊田　高久委員、中田　詠子委員、中村総一郎委員、野田　武委員、畠山　遵委員
松井　敦子委員、宮口　克志委員、宮田　徹委員、養藤　直哉委員

４　会議内容

(1)　開会
(2)　議事　富山県幼児教育の質の向上について
(3)　閉会

５　議事

（教育次長　挨拶）

事務局　―　（委員委嘱状交付）

特別委員　白梅学園大学名誉教授　無藤　隆先生は、第２回参加予定である。

（委員長の選出と承認、副委員長の指名）

事務局　―　（令和５年度 富山県幼児教育センターの取組について説明）資料 1

関係機関等との連携体制づくり

富山県幼児教育推進連絡協議会を年２回、３つの専門部会を年１回開催予定である。
県の関係部局との連絡会議、市町村幼児教育担当者連絡協議会は継続して開催する。

幼児教育の質の向上

１　幼児教育の質の向上及び園内研修の充実
幼児教育施設訪問研修は 60 施設訪問予定。アドバイザー７名、推進リーダー49 名。
幼児教育推進リーダー等の育成研修を年６回実施。今年度は７名が受講中。
園内研修充実のための研修会を今年度も２回実施予定。

２　幼児教育小学校教育への円滑な接続の推進
昨年度、幼小接続担当のスーパーバイザーを増員、幼小接続モデル校区への支援等。（希望に応じ、小学校の学校訪問研修会での指導助言等）
幼児教育・小学校教育接続モデル校区を令和３年度から毎年６校区ずつ設置し、今年度で県内全 15 市町村に設置が完了した。合同研修会の実施やスタートカリキュラムの作成等、校区の実態に合わせた取組をしている。昨年度の事例を、別添資料 1 幼小接続取組リーフレットにまとめ、県内幼児教育施設、小学校等に配布し、ホームページに掲載した。「わくわくきときと接続ガイド」の一部改訂、配布予定。
地区別幼小接続研修会幼児教育スーパーバイザーを活用し、小学１年生担任向けの研修を検討している。

３　その他
訪問研修で特別支援に関するニーズがある場合は、小中学校巡回指導員が同行。
別添資料「安心子育てリーフレット」は、今年度も作成、配布予定。

事務局　―　（令和５年度 富山県幼児教育推進連絡協議会 専門部会の説明）
昨年度同様、幼児教育推進リーダー活用部会、幼児教育施設訪問等研修部会、幼児教育・小学校教育接続部会の３部会を設置したい。
委員は、資料２ - ②専門部会の名簿のとおりである。今年度は本協議会が例年より遅くなったことから、部会は既に動き始めているので、ご了承いただきたい。

委　員　―　（推進リーダー活用部会 部会長　挨拶と説明）
令和４年度は、新規リーダーの補充、推進リーダーに求められる役割、推進リーダーの強みを県内の幼児教育の質の向上に生かすための活用方法を検討した。
研修内容や推進リーダーが幼小接続の視点をもって参加することを提案した。
推進リーダーの活動が持続可能な取組となるべく、さらなる検討が必要である。
令和５年度は、推進リーダーの活用方法を３つの視点で検討する。
１　推進リーダーに必要な資質能力に応じた研修内容の充実
２　推進リーダーによる分野別専門的プロジェクトチームを構成するための準備
３　保育や保育現場の実態調査を実施することの検討

委　員　―　（幼児教育施設訪問等研修部会 部会長　挨拶と説明）
令和４年度は、訪問研修を受けた園・所の体験談等の発信、推進リーダーに自分の園で訪問研修を受けることを呼びかけ、拡大を図った。
訪問前の打ち合わせの重要性を確認して、訪問研修の充実に努めた。
令和５年度は、「同僚性を育む訪問研修にするために」という視点から、訪問研修後、保育者がチームとして同僚性を高めるための工夫や考え方を検討する。
「※県内の幼児教育関係の研修ワーキンググループ」は、大変有用な機会である。

委　員　―　（幼児教育・小学校教育接続部会 部会長　挨拶と説明）
令和４年度は、モデル校区のスタートカリキュラム作成に取り組んだ。
幼児教育はこれまでどおり、５領域の保育を充実すること、小学校がスタートカリキュラムを作ることだが、十分浸透しにくい部分がある。
接続取組リーフレットに、スタートカリキュラム作成の留意点、カリキュラム例、研修動画のＵＲＬを掲載し、活用してもらえるようにした。
令和５年度は、スタートカリキュラムを運用してみてどうだったかを検討したい。

委　員　―　ワーキンググループは、幼児教育センター、訪問研修部会委員、県の子ども家庭室子育て支援課、関係団体の研修担当者が、研修について意見交換をする。
幼児教育推進リーダーがいくつかの園を繋ぐ役割を担い、合同研究会（ミニ公開保育等）が広がっていくとよいとの話があった。
令和５年度に子育て支援課の新規事業「ワークショップ研修」が始まった。３～５園程度で行う研修を財政支援する事業である。不適切保育等の防止にも有用であろう。

委員長　―　県内の幼児教育施設は約 300 であり、公立、私立の壁がなく、保育園、こども園、幼稚園の別もなく、一緒に訪問研修等の研修できることは、富山県の特色ではないか。
幼稚園は教育委員会管轄だが、市町村によっては施設に関しては子ども課等、複雑な状況である。国もこども家庭庁が動き始めているので、今のワークショップのように、つながりが出るとよい。もうすでに、富山県の中でいろいろな動きがある。

事務局　―　（幼児教育施設訪問研修の説明）
訪問研修がより充実することが、県内の幼児教育の充実に結び付くと考える。質の充実の視点から意見をいただきたい。

委　員　―　アドバイザーをしているが、ここ数年で、訪問研修が大分変わり、フランクに実践を語れるようになってきた。センターだより等によって、よさが認知されてきた。
自分も楽しく、勉強になる。不適切保育の事案もあり、積極的な参加は素晴らしい。
小学校や近隣園からの参加が増え、地域全体に理解度が進んでいる。

委　員　―　小中学校、高校の学習指導要領が変わり、幼児教育もだが、地域との連携の必要性を理解した。
県内では富山市、朝日町、立山町等コミュニティスクール等が行われている。
初めて参加したが、このような取組を知らなかった。保護者や地域への周知が必要だと思うが、連携強化の考えはあるか。
別添資料「安心子育てリーフレット」や親学びプログラムを活用し、幼児教育の保護者に連携を図れば、さらに広がりを見せると思う。

委　員　―　幼児期の体験、経験（非認知能力を付けるようなこと）は、とても大事である。
３つの部会で、現状の課題と理想が分からない。
小、中学校同様、幼児教育の現場でも、子どもの多様性、それに応じる教職員の負担が大きいことが課題であり、それに取り組もうとしていることが分かる。
園と保護者の方針の共有の場面がもっとあればいい。
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の姿)」を、保護者が理解し、具体的にどうすればよいか分かればよい。
幼児教育の現場から家庭にメッセージを発信してもらい、方針を共有するとよい。

委　員　―　自分の子どもは年長だが、入学に当たり、保護者が求めるのは、自分の子どもが学校になじめるか、ちゃんと元気に学校に行けるか、日常生活がしっかりできるか、勉強にもついていけるかという単純なことである。
特別な教育、技術は習い事等で行うが、学校ではどこまでやってもらえるのか。
地元に住んでいても、情報が入ってこない。家に回覧される小学校だよりでは、行事は分かるが、詳しいところまではよく分からない。
訪問研修等、保育、幼稚園は頑張っている。この研修を受けているから、ある程度の教育ができると一目で分かるような表示があると園選びの材料になる。

事務局　―　（「幼児教育と小学校教育の円滑な接続」の説明）
モデル校区が充分な成果を上げ、それを各小学校区が取り入れ、それぞれの実態に応じた幼小接続に取り組むための支援、発信について、ご意見をいただきたい。

委　員　―　保育園から移行した認定こども園には、年長の保育カリキュラムあるいは教育課程が、充分整備されていないという問題がある。
訪問研修等で触れる機会があれば、ぜひ進めていただきたい。
部会でこの話題を投げかけようと思っているが、その前に委員に共有したい。

委　員　―　幼児期の教育と児童期の教育の間が深い溝があり、カリキュラムが存在していない。
スタートカリキュラム編成上の主な留意点として、文科省は５点挙げている。
1　幼稚園、保育所、認定こども園と連携協力すること
2　個々の児童に対応した取組であること
3　学校全体として取り組むこと
4　授業時間や学習空間等の環境構成、人間関係づくり等について工夫すること
5　保護者への適切な説明を行うこと
幼保小連携の全国的な課題として、大杉住子氏（文科省）は、７点挙げている。
1　幼稚園、保育所、認定こども園の７～９割が小学校との連携に課題意識
2　半数以上の園が行事の交流等にとどまり、学びの連続性を意識したカリキュラムの編成実施が行われていない
3　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の姿)」が連携の手がかりとして充分機能していない
4　スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがばらばらに策定されていて、理念が共通していない
5　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」だけでは、具体的なカリキュラムの工夫や教育方法の改善方法が分からない
6　小学校側の取組が学校探検等の行事にとどまっているケースが多い
7　施設類型の違いを越えた共通性が見えにくい
以上のことを念頭におき、取り組んでいるところで、もうしばらく時間がかかる。

委　員　―　保育現場では、子どもの育ちを共有しながら、成長を支えることが大事だと認識している。話し合いや研修時間の確保など難しい課題もあるが、それでも資質向上に努めたい。年長児のカリキュラムの整備は、園によって差はあるが、検討すべき課題である。園と学校等で理念等を充分に話し合う機会がなかなかないが、重要性を再確認した。

委　員　―　近年は、「たくさんの園児を見たくない」「今、その職場から逃げ出したい」等、後ろ向きな保育者が非常に多い。
養成校の先生からは「高い意識をもった学生は多くない」という話を伺う。
訪問研修では、保育者はどこまでの意識をもっていたのか、どのようにして意識を高めるのか、伺いたい。
現場は非常に人手不足である。養成校に学生が入らないことや、コロナによる仕事量の増加、処遇改善のための研修等の負担もある。
違う角度からの発言だが、よろしくお願いしたい。

委員長　―　園の問題点を指摘していただいたが、各園共通しているのではないか。

委　員　―　自分の使命は、校長会に戻って広めることだと思っている。
昨年度から、「スタートカリキュラム」等のキーワードを紹介しながら、「どのように

スタートカリキュラムを作成しているか、情報共有しよう」と校長会で伝えてきた。
５月のアンケートでは、約半数の学校が、「地元の幼稚園と話をしながら作成している」という結果だった。非常に多い。だんだん浸透してきている。
コロナ禍で、保育所と学校での交流ができなかったが、５類になり、本校ではこの夏休みに教頭と特別支援教育コーディネーターが保育所等に訪問するときに、若い先生も一緒に行くことにした。幼児を見に行くところから始めている。

委員長　―　校長会でも、いろいろな形で取り組んでいる。今までは、幼児教育施設から小学校に（逆も）アプローチがしにくいとの話を聞いたが、風通しがよくなっている。

委　員　―　別添資料「幼小接続リーフレット」に「あの場面で声をかけなかったのは、10 の姿の中の『思考力の芽生え』を期待したからだ」と保育者が話し、「自分だったら声をかけてしまうところだった」と小学校教員が話す場面を例示されている。
子どもは、主体的に学んでいるとタブレット等を持っていろいろなところに友達と関わりに行くが、教師はその場面で何をすべきか。子どもが自由に自分の意思で動いていたら、それでよいのか。教育、保育はいかにあるべきか。これまで以上に教員、保育者の質を高めていかなければならない。放任ではまずい。
それと合わせて、保育でやっていることがなぜ大切なのか、なぜ必要なのかを、保護者の皆さんに伝えていく必要がある。
富山市立幼稚園は３園だけになったが、３人の園長には、小、中学校の校長との交流を勧めている。また、小学校から園に普段の姿を見に行くことが大事である。
入学してくるのは、公立３園からだけではなく、多くの私立の幼稚園や保育園から来るので、連携を大事にしたい。
教員同士、市との連携、そして保護者を巻き込んで、今、どういう教育を大事にしているのかを共通理解することが非常に重要ではないか。

委員　―　初めて参加したが、小学校との連携は大変難しいと思う。
24 年間ぐらい小学校に勤めていたが、１年担任は１回だけだった。その後、保育園に勤めているが、子どもたちに対するアプローチの仕方が小学校と保育園とで 180 度ぐらい違うことに非常に驚いた。保育園では、子どもの気持ちに寄り添って後押しするが、小学校では「こっちまで必ず来なさい」と言う。保育園のアプローチは、小学校の図画工作のアプローチにおそらく近い。
１年担任以外も、どのように子どもたちが成長してきたのかを理解する意味で、学んでほしい。また、１年生への接し方は、前の段階を知らないとどうしようもない。
小学校でやっていることを保育者は知らない。となりの保育園がどのような研究をしているかも知らない。横、縦の繋がりがない。交流を盛んにすることが第一。

委　員　―　これまでの訪問研修では、学校からの参加が難しかったが、今年は１年担任が全日参加し、「カリキュラムの新たな認識ができた」と言っていた。
できる限り、小学校教員に保育の現場を見てもらい、相互理解を深めることが大事ではないか。それによって小１ギャップも埋まり、学校に馴染みやすくなる。
訪問研修を続けてほしい。

委　員　―　　保育士を目指す学生は、意欲をもって日々学んでいるが、自信がない。現場に出る機会が少ないので、何とかしたい。
特別な支援が必要な子どもの幼小接続は、学生が研究する中にも出てきているので、何か光が見えるように取り組みたい。

事務局　―　　（幼児教育センター所長　挨拶）
（終了）